

令和 元 年度

となみ散居村学習講座

となみ散居村を学ぶ

第 4 回

- ・期 日 令和元年8月24日(土) 13時30分～17時00分
- ・内 容 となみ散居村の地域財産再発見

「 散居村のアズマダチとマエナガレ
—芳里家住宅 国登録文化財指定を受けて— 」

- ・講 師 砺波市文化財保護審議委員会
会長 尾田 武雄 氏



「芳里家住宅(上)と
杉森家住宅(右)」



1. 主 催 となみ野田園空間博物館推進協議会・となみ散居村ミュージアム

2. 後 援 砺波散村地域研究所

3. 趣 旨

砺波平野の散居村の生活、歴史、文化、自然、伝統芸能などの学びを通じて、地域を良く理解することにより、全国に誇れる散居景観の魅力を発信し、将来に向けて望ましい形の保全につなげる。

4. 講座内容 第4回 「散居村のアズマダチとマエナガレ」

(1) 会 場 となみ散居村ミュージアム情報館・研修室

(2) 進 行 13:30 ～ 開講
13:35 ～ 講義 尾田 武雄 氏
15:00 ～ 現地見学
17:00 ～ 終了(予定)

5. 年間計画 (1)別途年度当初配布の案内チラシ裏面に掲載しておりますが、今後の詳しい開催情報は、開催案内、各市広報又は散居村ミュージアム HP 等を通じてお知らせします。

6. その他 (1)特定の回だけでも受講できますが、事前の申込みが必要です。
(2)通常講座の受講料は、1回につき500円です。
(3)見学会(一日単位)の参加費などは、別に定めます。
(4)シンポジウム・公開講座のみの受講料は、無料です。

7. 次回の講座案内

～となみ散居村の地域財産再発見～
「公開講座 カイニヨのある暮らしの過去・現在・未来」
と事前見学会

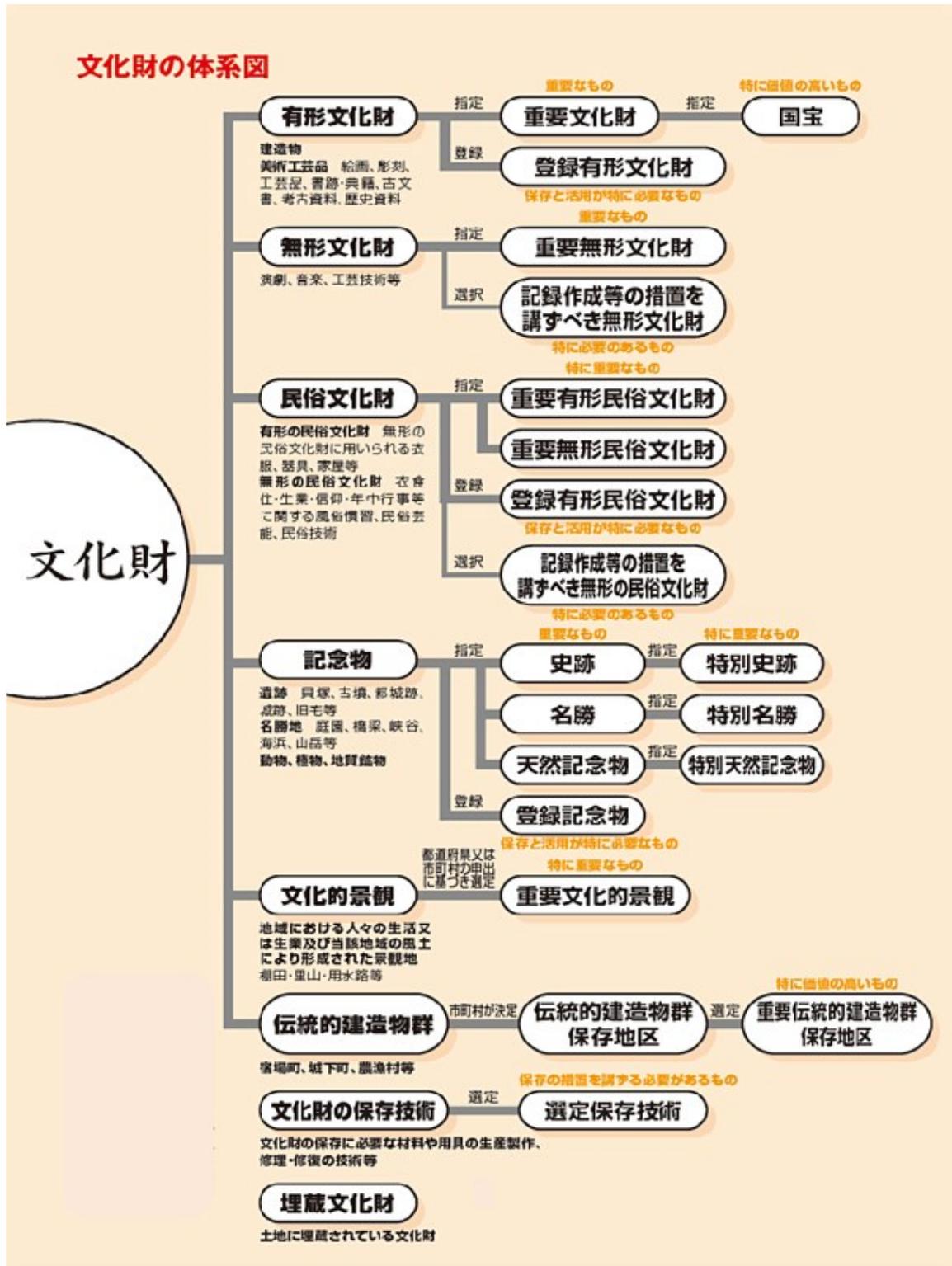
・講座 令和元年9月22日(日)13時00分～15時30分
・ところ となみ散居村ミュージアム研修室(受講無料)
・その他 詳細は、別途チラシを参照願います。

・見学会 令和元年9月22日(日)10時00分～12時00分
・ところ 砺波市五鹿屋地内 調査住宅ほか
・参加料 500円

* 講座、見学会とも、事前申し込みをお願いします。

(学習講座4-1)

文化財の種類



砺波市の文化財

砺波市には、国指定、国登録有形、富山県指定、砺波市指定文化財があり、現在 66 件が登録されています。代表的なものでは戦国時代の巨大山城である増山城跡やアズマダチの伝統的家屋である入道家住宅、砺波平野の生活文化を伝える砺波の生活・生産用具などがあります。

また、指定文化財に該当しないものの中で、地域の財産として親しまれ大切にされている文化的財産を保存及び活用し、後世へ継承することを目的として市では「ふるさと文化財」を創設し、現在 54 件が登録されています。代表的なものでは、景完教寺の聖徳太子孝養像（16 才の像）や珍しいコンクリート製の大仏である庄川大仏などがあります。

種類	国	県	市
有形文化財	1	7	29
民俗文化財	1	1	4
記念物	1	1	17
国登録	3		
ふるさと文化財			54
合計	6	9	104
合計			119

- 1 国指定史跡 増山城跡（下左）
- 2 国重要有形民俗文化財 砺波の生活・生産用具（下中）
- 3 国指定重要文化財 木造阿弥陀如来立像(下右)



国登録文化財

① 小牧ダム

平成 14 年 6 月 25 日・国登録

砺波市庄川町小牧矢ヶ瀬

昭和 5 年（1930）の完成時には、「東洋一のダム」と謳われました。

氷見出身の浅野総一郎が庄川電気として起業し、大正 14 年（1925）小牧ダム建設に着手し、紆余曲折を経て、5 年の歳月をかけて完成します。現在、庄川には御母衣ダムを始め、数多くの発電用ダムなどが設置されていますが、その中でも庄川本流で最初に完成したダムです。

ダムの堤体はアーチ状となっており、17門の供水吐ゲートが並び、排砂用ゲート、エレベーター式の魚道、木材流送用設備が付設された重力式可動堰型コンクリートダムです。建設には、設計工事監督を米ストーン・アンド・ウェブスター社に委託し、アメリカ人技師が来日しています。

② 庄川合口堰堤

平成 16 年 7 月 23 日・国登録

砺波市庄川町金屋

砺波平野を貫流する庄川に点在していた主に農業用水の取水口を集約(合口化)するため、戦時中の昭和 18 年に完工となりました。

庄川上流は川幅が狭く流量は豊富でしたが、下流は川幅が広く流心は曲折して大水の度に川床が移動するため、用水取入口はその都度変更を余儀なくされていました。つまり、日照りとなれば灌漑用水が不足し、洪水ともなれば取水口が破壊流失し、その都度被害は甚大でした。そのため、早くから用水合口の必要性が認識されていましたが、上流側と下流側の意見がなかなか整わず、上流に小牧ダムの建設がなったことから、ようやく、昭和 13 年に富山県は各用水の欠陥と農民の不安除去、用水利用の増進、取水の安定を期するため、灌漑と発電も行う多目的ダムとしてダム建設に取り掛かったのです。

③ 芳里家住宅

芳里家住宅主屋 芳里家土蔵 芳里家長屋門 3点

平成 30 年 11 月 16 日 答申 平成 31 年 3 月 29 日 国登録

砺波市堀内地区

芳里家住宅は、砺波平野に広がる散居村に見られる、典型的なアズマダチの住宅です。

建設後 50 年を経過したもののうち、国土の歴史的景観に寄与しているものとして、芳里家住宅の主屋、土蔵、長屋門の 3 件が、国の登録文化財に登録されたのです。

アズマダチの芳里家



砺波市堀内 50

芳里三治 (22 代目) (昭和 19 年 9 月 15 日生)

芳里家の伝承、系譜

戦国時代に増山城主の神保長職が、上杉謙信軍の猛攻を受け落城し、神保氏の家臣小野（小野津・芳里氏の先祖）氏がこの地に定住して開拓をした。藩政期は代々三助を名乗り、堀内の肝煎役などを代々務めた。

15代目三助に全盛期となり、

18代目三治（弘化4年11月15日～大正10年12月2日 75歳）は明治初年期の廃藩置県後に堀内村、則安村、中村の戸長などを務める。醤油醸造業などに携わる。この代の明治14年に母屋本宅を新築した。

19代三輝氏（明治3年5月16日～昭和23年11月11日 79歳）は実業家で油田村長。出町倉庫取締役芳里合資会社代表、共通銀行監査役、荒又合用水議員、郡農会議員村農会長、研究所長、県農会議員、消防組を創設し初代組頭、警防功労者。彫刻をよくし、特に仏像を好んで彫った。

20代三郎（明治27年12月18日～昭和47年7月20日 79歳）中等教育を受けて礪波中学卒業。天真爛漫の快男子で青年団長、警防団副団長、名誉助役で漆黒の長髭、趣味として絵をよくし、油田村長である。

21代三正（大正9年1月14日～平成16年2月14日）砺波市議員（昭和39年4月30日～昭和51年4月29日・三期）砺波市議会議長（昭和48年4月28日～昭和49年5月9日）

22代 三治

芳里家住宅の概要

明治14年に母屋本宅を新築（18代三治35歳）

明治43年に離れ座敷を増築（19代三輝40歳）

明治の後半期 茅葺から瓦葺きのアズマダチとなる。

主屋は、間口九間半、奥行九間で正面に三角形の大きい妻をみせるアズマダチの典型的な外観。

12畳半のヒロマを中心に正面側南に式台玄関と北に2畳の小間、南側は座敷になり床の間を設けた10畳の座敷と8畳の控え間とし、座敷の南側は正面から茶室として使用できる三畳の小間と仏間を設ける。仏壇は京都から職人を呼び寄せ造らせたものである。玄関を入ったヒロマはこの地方特有の「ワクノウチヅクリ」で、部材は総て檜の漆塗りである。故に賓客はその豪壮さに驚かされる。

芳里家住宅は材料、技術、意匠とともに質が良く大規模で、きわめて保存状態も良く、富山県西部の散居村に数多くみられるアズマダチ建築の典型例として貴重である。

長屋門は、明治43年19代三輝氏が建設した。建設当初は桁行六間七尺、梁間二間、切妻造り、棧瓦葺き、出入口を中央にほぼ左右対称になっていたが、平成15年に南側を解体した。

土蔵は、二階窓の板戸には「明治六年六月建之」と墨書がある。この土蔵の意匠は明治期に造られた砺波地方の一般的な土蔵であるが、その構造が富山県内において大変珍しい、校倉形式の柱の無いセイロ組み構造であるのが最大の特徴である。

その他

砺波平野は、日本農業の原風景とされる民家が散り散りに展開する散居村が広がる。この生活空間に適合した大きいアズマダチの家が散在する。最盛期には1万軒を超えたという民家も、徐々に減り現在では七千軒を超える程度に減少している。また、1人暮らし高齢者や空き家が多くなり、この美しい景観が失われる危機に瀕していると言われる。

空き家が増えている現状に、2010年にとなみ空き家利活用協議会が組織され、空き家の調査・アズマダチの再評価として民泊活動が3回行われる。その際には、芳里家住宅も提供され好評を得た。当時、準空き家状態であった芳里家であるが、民泊された方々、また、迎えた当主の双方に好評な体験となり、芳里家住宅の保存活用が求められた機会になった。

他にも、根尾家住宅は福井県吉崎の吉崎御坊蓮如上人記念館七不思議堂主屋となり、桜井家住宅は福祉センター麦秋苑として活用されている例がある。

今回、芳里家を国登録文化財に指定することにより、美しい散居景観の保存活用に貢献するのではないかと期待される。なお、敷地内の屋敷林の植生は昔ながらのカイニョの典型であると、砂田龍次氏の「屋敷林の植生1－芳里三正家の調査から－」（『砺波散村地域研究所研究紀要第3号』の調査報告に記載されている。）

マエナガレの杉森家



杉森家の歴史と住宅

1. 伝統的な家屋様式のひとつ「マエナガレ」である。2階はアマと呼ばれる収納スペースであることから、現状は95坪の平屋建てといえ、部屋数は14を数える。
2. 同家の歴史としては、西暦1600～1700年代は200メートル東方向の町並みに居住し、専勝寺杉森家が祖先、1650年代飛騨屋小右衛門より分家したと伝える。1777(明和14)年隣家の火災後、家主小右衛門が田んぼの中の高台に屋敷替えし、その屋敷替え頃にスギを植栽し、苗字は、スギに屋敷が囲まれていたことから「杉森」姓を名乗ったとされる。
3. 現在の家屋は、約130年前、庄川町庄の材木商の茅葺の家(その建材は飛騨から流送されてきたというもの)を分解して庄川を渡り、陸地はそりを使って運搬し、組み立てたと伝える。

4. その移築当時でも、樹齢100年～200年のスギに囲まれていたと推計できる、暴風(井波風)への配慮の必要が無く、東南東向きに立てたといわれる。(近隣の家には北または北東向きが多い。これは、同地域には、地形的に川が東西方向に流れるため、玄関口に川を向けたためといわれる。)
5. 1909(明治42)年にいわゆる屋根をおろし、茅葺から瓦葺の「マエナガレ」に変わる。同家の下屋根の上部に見られる突き出た木材は「茅葺屋根の名残」である。
6. 終戦直前の1944(昭和19)年には、スギの大木数本を供出する。また、同年、家の裏手の一番大きなスギに落雷があり、このため、以後20数本のスギの大木が枯れて伐採される。また、カシの大木1本が納屋にかかり、伐採されている。
7. 1972(昭和47)年辺りの圃場整備事業により、従来の小川が無くなったり、田んぼの地層が変化したことからか、樹木の衰えが出たといわれる。
8. 古来、伐採したスギ材は挽いて保管する。そして、増築や補修の度に建材として使ってきた。(池中、大工小屋、納屋などに保管)
9. 平成16年10月21日の台風21号、平成24年4月3日の爆弾低気圧被害(いずれも北風)でも、多くのカイニヨが失われた。



「杉森家のワクノウチ(上・下)」



敷地内にある銅像

明治十五年七月十二日東野尻村苗加川辺市郎右衛門家長男として生まれ巖磨と名付けられる明治三十九年一月 養子縁組入籍 大正七年一月小右衛門を襲名せらる 当年八十三才の健康体 永年の勤勉努力の功績を讃え 後世嗣子の模範とせんが為 長命を記念して建立す
昭和二十九年三月

	嗣子	小市
	妻	文子
	子	孝一
		孝昭
		山田幸子
胸像	原型	米 治一
全	鑄造	近次銅器株式会社



カイニヨの特徴の今昔

1. 杉の大木中心の屋敷林であるが、ウラジロガシ・ヤブツバキ・ケヤキ・イチョウ・モミ・エゾユズリハなどで構成されている。
2. 杉森家の屋敷地には、15年前には、樹齢100～300年の、樹高20～30メートルの大木約30本があったことが記録されている。
3. 2005(平成17)年の家屋北側改装時に、「モウソウチク」の一部を残している。
4. スギの大木2本が、門スギの様相を呈している。
5. 約2,000平方メートルの敷地にスギを含めて、百数十本の木々が茂っている。
6. クーラー要らず。外気温より数度低いという。



明治以降、茅葺き屋根は瓦屋根になり、両者はそこから生まれた建築様式です。左図の「妻入り」、「平入り」は、どこに出入口があるかで分類される。妻入りは「妻」側、平入りは「平」側に出入口があります。切妻というのは屋根の形式のことで、傾斜面に本を伏せて置いたような単相な形をしています。



散居村の農家の広い屋敷地の中には、近代になると、母屋(おもや)を中心として納屋や土蔵(どぞう)、灰小屋(はいごや)などが造られます。母屋は平野部では主に東を向いて建てられ、前庭は広く、昔は農作業の作業場所としても利用されました。季節風が強い西側と南側にはスギを中心とした屋敷林を植え、屋敷地の周りにはスギの生垣をめぐらせています。

母屋の建物は、かつては茅葺(かやぶき)屋根でクズヤと呼ばれる家でしたが、明治中期以降は徐々に瓦葺に変わりました。

家屋の間取りとしては、広間を中心として座敷・茶の間・寝室・台所などを配置した広間型です。中心となる広間は、冬の積雪に耐えうるように太い柱と梁(はり)で頑丈に作られました。これをワクノウチヅクリと呼びます。主に浄土真宗が信仰されて座敷には大きな仏壇が置かれています。冠婚葬祭や仏事などの際には、座敷と広間の間の戸をはずし、大広間となり多くの人が集まれる仕組みとなっていました。

